8 月 7 日ー8 月 8 日

勝部　知早野

1) 訪問先：①成田国際空港→バンコク国際空港→アジスアベバ→ウィントフック
②初日オリエンテーション　③歓迎夕食会

2) 研修内容：世界のつながりを知る（国境を越えた移動、協力）、ナミビアを知る。

3) 所感：バンコクまでは、6 時間 45 分、バンコクからアジスアベバまでは 8 時間 40 分、アジスアベバからウィントフックまでは 5 時間 45 分と、飛行時間が合計 21 時間 10 分のフライトでナミビアを目指した。乗り換えの時間も全て含めると時間にして、25 時間 20 分かかってウィントフックに到着した。凝り固まった体で荷物を引きながら、ずいぶん遠くまで来たと実感しつつ、共に移動する民族多様な多くの乗客の姿に、長かった新型コロナウイルスの流行による海外移動の自粛が終わり、再び世界の人が国境を超えて動いているのだと感じた。

長いフライトの最中、何度も機内食が出た。“Beef or chicken? “とオプションがある。選べることに喜びを感じつつも、ふと、すべての乗客がどちらを選んでも良いほどの在庫があるということや、眠っているためにたくさん残している乗客が多いことに機内食のフードロスが気にかかった。調べてみると、SDGs に向けた取り組みを求める声から、事前にキャンセルできる制度や未着手の機内食を慈善団体へ寄付する活動が出来てきているということだ。過剰なサービスの提供に利用者も意識を向けることが重要だと感じた。

空港に着くと、JICA ナミビアスタッフの坂田さんが温かく迎えてくださり、ホッとした。からっと乾燥した空気が半袖に気持ちよく、強い日差しを肌に感じた。この国は洗濯物が 1 時間くらいで乾くとか、鼻が乾燥して鼻血が出るため、リップクリームを鼻の中にも塗るとか、非常に乾燥していると事前に聞いていた。日本のじめっとした暑さとは対照的だ。

初日オリエンテーションの中で、JICA のナミビアでの取り組みを学んだ。そこで、世界の国が認める普遍的価値とは何かを議論する場面があった。日本がしているナミビアの経済発展を支援する活動は本当にナミビアにとっていい活動なのか。環境破壊や経済格差を助長することにならないか。それに対する答えとしては、失業者の多いナミビアについてはまず人の命が保証し、生きていけるようにするという普遍的価値のために活動をしているということだった。SDGs は 17 のゴールがあるが、それぞれの国によって現状と優先すべき事柄が異なるので簡単には全ての達成ができないということ、ナミビアにおける格差や失業者の多さは、取り組むべき喫緊の課題であるのだということを強く感じ、より良い社会を作る上で相手の見ている景色にしっかりと目を向けることが大切だと思った。

ナミビアの HOSEA KUTAKO 国際空港にて

2 種類の機内食

多文化に合わせた空港内の礼拝施設

8 月 9 日（水）午前

記録者：田淵　野藍

1) 訪問先：NIED（national institute for education development）
2) 研修内容：
●自己紹介→双方の自己紹介を英語で行った。
●所長挨拶と説明→NIED について・ナミビアの教育について等を聞き、その後に質問をし、各専門の分野の方から回答していただいた。
●施設見学（ティータイムを含む）→NIED 方と会話をしながら施設見学をした。
3) 所感：

NIED（national institute for education development）は、組織として行っていることは、大きく分けて 2 つあると説明を受けた。一つ目は、カリキュラムの構築、二つ目は、教員養成である。具体的には、教科書の選定や指導要領の開発、教員研修ということがあった。これらを聞いて、NIED がナミビアの教育の中核であることを改めて感じた。また、所長の話す言葉からは、力強さや強い思い、信念のようなものが伝わってきた。その中でも、「教育とは、質の向上が最も重要である。そのために改善を繰り返していく。」という言葉が印象的だった。独立から現在に至るまで、人種、肌の色、男女、貧困など多くの課題がある中で、ナミビアの教育を進めよう、改善しよう、よりよくしようという強い思いが伝わってきた。また、そのために、「Based on 4 national goals」という「access」「quality」「democracy」「equality」4 つを目指して，「on going program」（開発し続けるプログラム）として教育を位置づけるということも知り、よりよい方向へと変化しようとするナミビア教育の力強さを感じた。そのために、JICA を含む様々な国際的な協力機関または機構に、協力を求め、他国の教育の良さを取り入れたり自国の良さや改善点を再検討したりすることを知り、国際的な視点から自国の教育を見る視点の良さや、多様な考え方を受け入れる寛容性を感じた。

一方で、質疑応答の時間から、ナミビアの教育事情における課題も改めてわかった。大きく分けて 3 つあったように思う。1 つ目は、子どもたちの基礎学力の弱さ（計算、読み、書き）、2 つ目は、母国語と英語の双方の教育を行う難しさ、3 つ目、教員の指導力の低さである。私たちの質問に、各専門分野の方が回答してくださった。どの回答においても、課題解決に向けて進めるためには、ナミビアの経済面、文化・歴史的な背景が必ず絡むことが印象的だった。考えてみれば当たり前のことであるが、国の将来を担う子どもたちの教育を考えるにあたって、国全体の課題は無視できないと改めて感じた。（これは日本においても同様であると思う。）

全体を通して、ナミビアの教育事情を知るにあたり、様々な立場の方から考えや意見をいただき、客観的にナミビアの教育を知ることができた。また、私たちの質問一つ一つに NIED の全員が、丁寧に、詳細に、強い思いや考えをもって答えてくださったことが何よりも強く印象に残った。この時間に知ったことや感じたことをもとに、今後の現地の学校の視察を行いたい。

8 月 9 日（水）午後

記録者：阪倉　順子

1) 訪問先：

Ebenhaser 小学校訪問

2) 研修内容：

●Ebenhaser 小学校訪問　　森　結香　隊員

昼食会場で森隊員と合流，隊員活動等の話を聞く。小学校へ移動し２年生算数の授業見学。現地語を話す先生と協力しながらの授業の様子がよく分かった。その後，校内見学・森隊員への質疑応答となった。

3) 所感：

午後は鉱山資源の町 Karibib へ移動した。Karibib は山に囲まれた小さな町で大理石や宝石の採掘・加工，そして金の鉱山が有名である。人口は約 5000 人で母語の違った様々な部族が住んでいる。Ebenhaser 小学校は日本の年長クラス～7 年生（中学 1 年生）までの約 1200 人が通っており，教師は 35 人である。教師も教室も足りないために，子どもたちは学年ごとに午前と午後に分かれて登校していた。3 年生までは母語ごとにクラスを分けて授業が行われるが，4 年生からは全員が英語での授業となる。今回は，2 年生算数「時計」の授業で，森隊員の英語を現地のギルソン先生が子どもたちの母語に訳しながら進める授業を見学した。

授業が始まると，子どもたちは後ろに並ぶ他国の参観者のことが少し気になりながらも，森隊員とギルソン先生の方をしっかり向いて集中して授業を受けていた。手元を見ると，段ボールや空き箱といった廃材を活用した手作りの時計を持っており，教師の指示のもと，自分の「起きる時刻」「朝ごはんを食べる時刻」「学校へ来る時刻」「家へ帰る時刻」「寝る時刻」等を表していた。森隊員とギルソン先生との二人の呼吸もピッタリで，全体交流では友だちの意外な発表を聞いて「え？そんな時間に起きているの？」と教室の中が笑いで包まれる場面もあり，子どもたちが時計に親しみながら楽しく学習を進めている様子を見ることができた。そして，授業の最後はお祈りで締めくくられ，日本では見られない厳粛な雰囲気に大変驚かされた。

授業後には校内を案内して頂いた。教室には現地語や英語で書かれた様々な掲示物，廃材を活用した教具など，先生方の工夫が随所に見られた。また，パップ（ナミビアの主食とうもろこしの粉からできたもの）を作る給食調理場，昼食が買える売店を案内してもらった時には，学校での給食しか食べていない一日一食の子どもがいることを聞き，キラキラした子どもたちの笑顔の裏にある厳しい現実に対してのやるせなさを感じた。

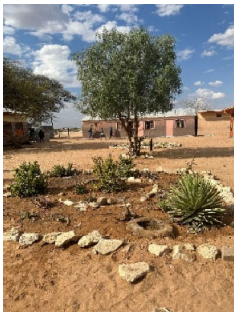
森隊員との質疑応答では，厳しい家庭環境に置かれた子どもたちが多い学校ではあるが，月２ドルを支払える家庭は毎月学校に納め，それを無料の給食配布や文房具代にあてるといった共助の意識があるということ，いろいろな民族が集まっているため違うことが当たり前で排除やいじめがないということなど，日本の学校とは違うプラス面についても聞くことができた。

この日の振り返りでは，午前中のＮＩＥＤ（国立教育発研究所）で聞いた「研究の成果」と午後の Ebenhaser 小学校で見た「現場」とのギャップから，英語教育とは，特別支援教育とは，インクルーシブとは，いじめとは，地域とは・・・等など教育の理想と現実を目の当たりした後に

考えたことや日本の教育を改めて見つめなおしたことを伝え合う貴重な時間となった。

現地語教師との授業

校内には図書室や売店もある



手入れが行き届いている校庭

8 月 10 日（木）午前

記録者：荒木亜紗子

1) 訪問先：ウバセン(Ubasen)小学校

2) 研修内容：

●校内見学

自己紹介や校長先生からの学校紹介の後、校舎、運動場、授業の様子、調理場を見学した。

●豊田隊員の授業参観

４年Ｂ組の算数の割り算の筆算の解き方についての授業を参観した。

●交流授業

・４年Ａ組のクラスでは、まず「幸せなら手をたたこう」の手遊び歌を一緒にした。次に6人グループに分かれ、「ラッキーハンカチゲーム」という音楽が止まった時にハンカチを持っている児童に日本の教師が好きな食べ物や色など質問をする交流を行った。

・７年Ａ組のクラスでは、まず「幸せなら手をたたこう」の手遊び歌を一緒にした。次に５，６人のグループに分かれ、事前に用意してもらっていた将来の夢（やりたいこと）の絵を紹介してもらい、日本の子どもが描いた将来の夢も紹介する交流を行った。

●休憩時間

ナミビアの給食「パップ」を食べる様子や児童生徒の歌や民族ダンスの見学をした。

3) 所感：

「児童生徒に対して、教室の数が足りないから、午前と午後に分かれて授業を行っている。」とお聞した通り、１つの教室に約４０名と、どの教室も子どもたちでいっぱいだった。そんな中、T1として算数の授業されている豊田隊員の話を一生懸命に聞く４年Ｂ組の子どもたちの様子がとても印象的だった。３年生までは母語による授業だが、４年生からは全ての教科が英語による授業となる。さらに、多くの子どもたちが苦手意識をもっているとお聞きした算数の授業。しかも割り算の筆算。母語で教えても難しい内容だと感じたが、手作りの教材の１つ１つに工夫が凝らされ、視覚的に分かりやすく、イメージしやすいようになっていた。また、筆算を解く順番を繰り返し唱えて覚えたり、声に出しながら解いたりする工夫も浸透しているように見えた。たまたま私たちが参観させていただいた授業は、子どもたちにとってはハードルの高い内容の日だったと感じたが、それでもあきらめずに真剣な眼差しで話を聞いたり、問題を解いたりする姿を見て、言語の違いや教科の得意不得意以上に、子どもたちが理解できるようになって欲しいという豊田隊員の熱い想いが、子どもたちに伝わっていることが良く分かった。子どもたちに向き合う真摯な態度、教材の工夫や子どもたちに合わせた教授法の大切さなど同じ教師として学ぶべきこと、再確認できたことが多くあった。休憩時間には、豊田隊員の周りに多くの子どもたちが寄ってきていた。授業の始まりのタイミングには子どもたちに教室へ戻るように声をかけながら、寄り添って教室へ帰っていく姿に、いつも同じクラスに行っているわけではないと言われていたのに、きっとどのクラスでも豊田隊員の人柄が伝わっていて、良好な人間関係の構築がなされているのだろうと温かい気持ちになった。

交流授業では、４年生でも、７年生でも「幸せなら手をたたこう」の手遊び歌を紹介すると、ス

ッと受け入れ、マネをして一緒にできるところが、さすが多様性を受け入れ生活しているナミビアの子どもたち！と感じた。４年生の「ラッキーハンカチゲーム」では、少し時間が余ったので、その時間を使ってグループの全員にいくつか質問をしてみた。好きな動物を尋ねると、「チーター」や「ライオン」と言ったアフリカならではの動物だけでなく、「犬」と言った身近な動物も出てきた。好きな教科では、「自然科学と健康」や「家庭科」という答えが返ってきた一方で、苦手な教科は「算数」と口をそろえて言い、前学期はどういう評価がついたかまで口々に教えてくれる人懐っこさには驚いた。７年生では、将来の夢（やりたいこと）について尋ねた際、英語への理解度は高いと感じたが、少し深い話になると難しく感じる児童もいた。しかし、他の児童が現地語でさりげなくサポートし、自然と共助ができていた。大統領や歯医者など大きな夢をもつ児童もおり、その夢が叶うような教育改革や身近なモデルとなるべき家族や地域の人の就業率を上げることの重要性を感じた。

基本は授業と授業の間に休憩時間はないが、４時間目と５時間目の間だけ休憩時間があった。子どもたちは全員教室から出る。多くの子どもは調理場に集まり、パップと呼ばれるトウモロコシの粉で作られたお粥のようなものを順に受け取り、美味しそうに食べ、食事が終わると自分で大きなバケツのような中にお皿を入れ、そこで洗ってから返していた。この小学校に通ってくる子どもたちの保護者のほとんどが失業中で、食事は一日でこのパップ一食のみという子どももいるという話を伺った。日本でも給食が貴重な栄養源となっている子どもも少なくない。状況は違っても、学校の果たす役割の大きさを感じた。休憩時間の終わりに、多くの児童が集まり歌を歌ってくれた後、１つの民族が代表してダンスを披露してくれた。私たちや、他民族の友人が見守る中、堂々と踊る姿に自分たちの部族のアイデンティティを大切にする意識と、お互いの民族を認め合っている雰囲気が漂っていて、心が揺さぶられ、自然と涙がこぼれ落ちた。日本の誇るべきアイデンティティやお互いを認め合える多様性について、自分自身が改めて見つめ直し、児童と共に考えていきたいと感じた。

豊田隊員の算数の授業

食器洗いをする子どもたち

将来の夢の紹介

民族ダンスの披露

8 月 10 日（木）午後

記録者：藤原　孝夫

1) 訪問先：NIMT（国立ナミビア鉱業技術研究所）
2) 研修内容：学校紹介および実習見学（副校長・加藤穂高隊員）
3) 所感：

〇NIMT（国立ナミビア鉱業技術研究所）概要

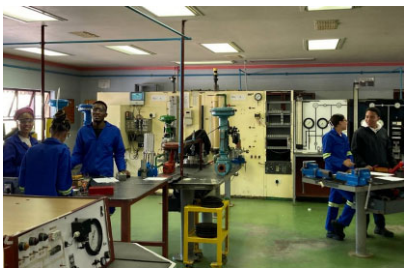
NIMT は、エロンゴ州アランディスを中心に設置され、加藤隊員が電気・電子設備教師として派遣されている職業技術訓練機関である。NIMT の目的はナミビアの未来を担う質の高い技術者の輩出にあり、全 12 学科で約 4,000 人の生徒が在籍している。NIMT の教育は、理論と実践の二本柱で展開され、最初の 1 年で専門教育に必要な基礎的な知識と技能を学び、2 年目以降に専門教育に移行する。また、1・2 年生は、半年間をジョブ・アタッチメント（日本のインターンシップに相当）に参加し、3 年生は約 1 年間のジョブ・アタッチメントに参加することで確かな技術と社会経験を積む。NIMT では、放課後の掃除を通じて規律を涵養しており、このような規律とジョブ・アタッチメントを通じた確かな技術を育む教育は、企業から高く評価されている。

〇所感

「過去 3 年間の経済危機と地政学的危機が絡み合った結果、労働市場に対する不確実で多様な状況が生まれ、先進国と新興国の間、および労働者間の格差が拡大した。」と『仕事の未来レポート 2023』（世界経済フォーラム）は指摘し、企業による労働者に対するスキルトレーニングの重要性を示唆している。NIMT は、この様なグローバルな課題に資する教育機関であると感じた。また、NIMT で活躍する加藤隊員の姿からは、確かな技術教育・現場と共生する態度・ナミビアの未来を技術面から支えようとする志を感じた。そして、JICA ナミビア支所の活動が、現地の人々と共に問題解決の方途を探るという、現地に寄り添った協力であることをここでも実感した。さらに、NIMT では、長期にわたるジョブ・アタッチメントを通じて、企業が求める技術を実践的に習得することを目指している。この長期間のジョブ・アタッチメントは、科学技術イノベーション政策を推進する日本においても魅力ある長期研修制度であると考える。一方、NIMT の在籍は、ナミビアの性別役割分業観に由来して男子に偏在している（男女比は、男子 10 に対し女子 1 程度）。これは、理工系学部に男子学生が偏在する日本に共通する社会課題であると感じた。今回の NIMT 訪問を通じて、確かな技術の習得がだれ一人取り残すことなく享受でき、格差が是正されていくことの必要性を感じ、そのために自分ができることについて自問する良い機会となった。

＜学校紹介＞

＜実習施設見学＞



＜実習風景＞

8 月 11 日（金）

記録者：井上　裕美子

1) 訪問先：ウォルビスベイ港視察（物流ハブプロジェクト）

2) 研修内容：

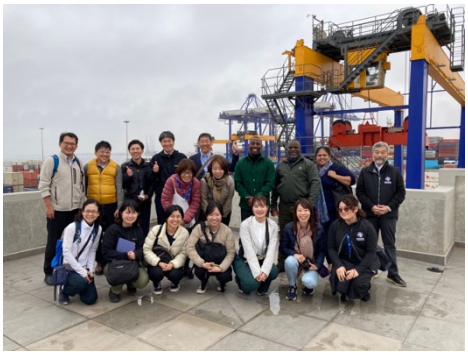
●ウォルビスベイ港視察（物流ハブプロジェクト）
JICA の取り組みである、物流ハブプロジェクトの見学をさせて頂いた。

●協力隊の方達とのお食事会

3) 所感：

ウォルビスベイ港は、JICA も力を入れている取り組みの一つである。ナミビアは、日本と比べて面積が２倍あり、人口が半分ほどしかいない。ナミビアの持ち味を活かす取り組みとして、長いスパンをかけて行われてきたプロジェクトである。一つの港だけでなく、北港と南港を開発・運営している。小ぶりな船だけでなく、コンテナをたくさん積載できる大きな船を接岸できることが強みである。隣国のザンビア、コンゴでは銅が採れ、どの港から出すか選べるのでより安く、安全に輸出できる方法を教えて、他国ではなく、ナミビアを選んでもらえるようにコンサルタントしている。

この後の食事会では、国際的に働く上で大切なことを教えて頂いた。桑原さんには「①途上国から求められる技術力②相手の背景を推察するコミュニケーション力③やる気」ということを教えて頂いた。自分の価値観を押し付けるのではなくて、相手と対話をしながらより良いカウンターパートの関係を築いていくことが大切である。また、松田さんによると、「自分が当たり前だと思っていることが当たり前じゃないと思える人になる。」と教えて頂いた。



ウォルビスベイ港にて集合写真

ウォルビスベイ港の説明を受けている様子

港のコンテナの様子

お昼のお食事会（松田さん）

8 月 12 日（土）

記録者：寺田　美優

1) 訪問先：①Sossusvlei　代表的な観光地（ナミブ砂漠の砂丘）視察
　　②サンセットツアー

2) 研修内容：

●ナミブ砂漠

ナミブ砂漠のなかでも代表的な観光地である Deadvlei、Dune45 を視察した。

●サンセットツアー

宿（Bushman's Desert Camp）のサンセットツアーに参加した。

3) 所感：

ナミブ砂漠は世界最古の砂漠であり，ナミビアの大西洋岸に沿って幅約 100 キロメートル以上にわたって分布する海岸砂漠である。その中でも Sossusvlei と呼ばれる代表的な観光地を訪れた。その中の Deadvlei は，白い地面に、何百年も前に枯れたまま残った木が立っている場所である。有機物を分解する生命がおらず、枯れた木がそのまま残っているそうだ。過酷な環境であるが、キリアツメゴミムシダマシやアリなどの生物を見ることができ、その生命力に驚いた。木はすべて独特な形をしていて、それぞれお気に入りの一本を見つけ、写真撮影を行った。

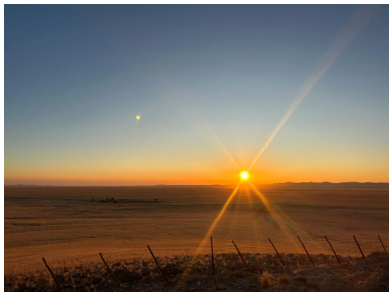
Dune45 では、ナミブ砂漠の砂を肌で感じるために、裸足で登った。砂はとても細かくさらさらとしていて足が沈んでしまい、上手く歩けない。砂はひんやりとしているが、表面の砂は太陽が強く照りつけると徐々に熱くなる。また、風が強く吹き、砂が体に当たってしびれるように痛くなった。風が吹き砂丘の尾根の形が変わるのも分かった。砂丘が絶えず変化していることから、自然の力を感じることができた。私は頂上まで登れなかったが、それでも砂丘からの眺めは美しかった。空の澄んだ青さと輝く砂の赤茶色のコントラストはいつまでも記憶に残るものになりそうだ。

Bushman' s Desert Camp に戻り，サンセットツアーに参加した。広い空の色は変わり続け、地平線の先に太陽が落ちるように沈んでいった。日本では体験できない，言葉では表現できない美しさに圧倒された。大地を前に、自分の悩みはとても小さいもののように感じた。

この日の振り返りでは、自然の偉大さや観光地のごみ問題について話が出た。世界各地の観光地ではごみ問題が課題となっているが、Sossusvlei ではごみがほとんど落ちていなかった。美しい自然を前にごみを落としてはいけないという意識が人々のなかに生まれるのか、罰金があるのか、なぜかは分からないが、この環境から学ぶべきことがありそうだ。私たちは豊かな自然環境のなかで生活しているが、本体験から自然に生かされている存在であり、今後も共生するために何をすべきか考えていくことの大切さを再認識することができた。また、宿を経営している方はマラウイ隊員 OV の方であった。これまでの経験やナミビアの現状について教えていただき、非常に充実した時間となった。

Deadvlei の木の前で

Dune45



地平線に沈みゆく夕日

8 月 13 日（日）

記録者：島田修司

1) 訪問先：移動日

Bushman’s Desert Camp → Windhoek 市街

Katutura（市場、現地職員宅訪問）

移動途中、南回帰線を超える。英語の Capricorn は「山羊座」の意味で、古代バビロニア時代の呼び方に由来する。

2) 研修内容：

●ウィントフック視察

●中間振り返り（これまでの研修の振り返り、山中先生指導助言）

3) 所感：

宿のオーナーよりブッシュマンについての説明を受ける。サン族は毒矢を使って、人も動物も襲っていたため、人として扱われず、白人も黒人もサン族を狩っていたという歴史がある。移動民族で水分は獲物の血液などから得ていた。１回に 10kg もの肉を食し、数日は何も食べずに生活できた。食事後のお腹は膨れ上がり、そのためお腹には深い皺が寄っていた。大地でそのまま食べることで、肉には砂などが付着していたため４０歳ころには歯が擦り切れてなくなってしまっていた。寿命は５０年くらいで、移動民族のために出産は１０年に１度くらいのペースであった。他民族国家であり、様々な種族からなるナミビアの一面を知る機会となる。

また、荒野にたたずむ宿のため、水源や電気供給が気になるが、そのことについても説明を受けた。水源はボウリングによって地下約２３０ｍからくみ上げている。電機は太陽光発電、及び蓄電設備によって供給されている。また、周辺の植生について、この乾いた大地に根を生やしている樹木（アカシア）は地下 80m まで根を伸ばしているとのこと。大自然の中で生きる動植物のたくましさと、そこで生活することの大変さ、そして人の英知と技術を感じる。

ウィンドフックに帰着し、タウンシップのカトゥトゥーラ地区を訪れる。ナミビアが南アフリカに併合されていた頃のアパルトヘイト政策下における黒人居住区である。そこの市場を訪れ、牛肉とパップ（トウモロコシやヒエの粉をゆでて調理したナミビアの主食）を手でいただく。治安が悪く、要注意とのことであったが、日曜日ということもあり、とても活気があって、人々の生活の息づかいを感じることができた。（昆虫食にも挑戦したかったが、既に売り切れていたためいただくことができなかった。）

その後、現地職員宅を訪問。一般的中流家庭の生活を垣間見る。

宿舎において、これまでの研修視察で学んだことや感じたことなどについて振り返りと気づきを共有した。

8 月 14 日（月）

記録者：田中　麻生

1) 訪問先：在ナミビア日本大使館

2) 研修内容：

●表敬訪問…大使との昼食会（研修の所感など報告）

西牧大使、定本参事官、教師海外研修団 12 名、洲崎所長

●最終報告会に向けての準備

3) 所感：

研修も終盤になり、みな緊張した面持ちで表敬訪問に向かった。挨拶を交わして、それぞれの席に案内された。大使、参事官のあいさつの後、各自、自己紹介と今回の研修についての所感を述べた。それら所感について、大使が思うところをお話しくださった。

まず、8 月 8 日（火）西村経済産業大臣がナミビア共和国に来て、アルウェンド鉱山・エネルギー大臣及びイープンブ産業化・貿易大臣との間で、鉱業分野の協力、投資環境整備及び経済協力に関する共同声明に署名したことが話題になった。両大臣が、今後の鉱業分野での協力拡大についての原則を確認したことやクリーン水素の分野での協力の可能性についても議論していたことを教えていただいた。

次に、アフリカのお米の話が研修団から出て、ナミビアのお米プロジェクトについてもお話しいただきました。アフリカの多くの地域では、トウモロコシ類の粉をお湯に溶かしてつくる「ポリッジ」と言われるものが主食になっている。しかし、近年ではお米の消費が増え、需要が高まっている。また、作る側にとっても、トウモロコシよりもお米の方が 2～5 倍の値で売れることから、栽培する人が増えているという。また、国内の人口が少なくても、保存ができるお米だと他国に輸出できる利点もある。これもまた JICA のプロジェクトで、帰国後、サイトで調べてみるとナミビア通信～のんびり～2019 年 7 月 No.11 にその記載があった。

最後に、外務省 ODA 出前講座の話を教えていただいた。調べてみると、100 回以上の開催記録があり、主に高校や大学が利用していた。

研修の最終報告会資料作りの前に、大使とお話しでき、国家間で行われる経済活動や経済協力という、もう一つ新たな視点からナミビアを見る貴重な時間になった。

オゴンゴライス

表敬訪問　記念撮影

昼食会の様子

お話を聞きながら会食

8 月 15 日（火）

記録者：樋口　一貴

1) 訪問先：ＪＩＣＡナミビア支所

2) 研修内容：

● 研修参加者発表

ペアでの５グループによるテーマに分かれての発表。以下、５つの発表テーマ。

① NIED　② Ebenhaeser PS　③ Ubasen PS　④ NIMT　⑤ Walvis Bay

3) 所感：

上記のテーマ別に、三観点（①所感：ＪＩＣＡの事業や関わり・国際協力の在り方　②授業づくりや今度の展望：どんな理由でどんな学びにつなげるか　③深めたいこと・疑問点など）に絞ってまとめた内容を発表しました。各発表後には、さらに詳細な情報や疑問点への気付き等を洲崎支所長から即座に頂くことができ、より一層深く学べる時間となりました。

これらの発表を通して、学校が果たせる役割は何か？その教育や施策がなぜ必要で、次にどんなことが起きるのか？限られた資源で最大限のパフォーマンスとは？どのような社会であることが望ましいか？魅力あふれる国際協力の職に対する保障とは？自分の思い込みでストーリーをつくらないようにするためには？などと、考えを巡らせることにつながりました。

また、キャリア教育の視点において協力隊員の姿から「楽しみ・苦しみ・チャレンジ」を学ぶことができる、と振り返りの中から感じました。自分の意志を大切にできる、壁を乗り越えられる、働くことについて考えられる、このようなことを考えるきっかけを与えられる隊員たちの姿を、日本の子どもたちや地域の人々に伝えていきたいです。

あっという間のナミビアでの研修を終え、空港に向かいました。ウィントフックからアディスアベバ行きの機内で、ウガンダ人のトニーという男性と隣席になりました。彼は、元々教師でしたが現在は国連ＷＦＰ職員を務めているようです。お互いの情報を交換する中で、「日本といえば、ＪＩＣＡを知っていますか？」というトニーからの問に対して『はい、私たちはＪＩＣＡ関連でナミビアを訪れました』と答えると、「ＪＩＣＡのつながりなのですね！ＪＩＣＡはアフリカのあらゆる地域で活動してくれていて、その貢献度の大きさに大変感謝しています！」と話が広がっていきました。ここでも「蒔いた種」を感じることができました。即効性がなかったり成功と言われているプロジェクトは少なかったりと話を各方面で伺いましたが、確実に残っているものがそこにありました。これは、今後の私たちの活動にも通じるものがあると思います。

研修参加者発表

現地職員との集合写真

帰路航空機内